

小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧について

森 貴教(新潟大学)

林 大智(公益財団法人石川県埋蔵文化財センター)

はじめに

弥生時代の生業を支える道具としての石器は、水稻農耕社会に必要な不可欠の文化要素である。なかでも柱状片刃石斧は、木工具として生産用具の体系の中で基幹をなす物資であり、農耕文化の担い手や文化受容の在り方を考察するうえで注目され、これまで研究が蓄積されてきた(下條1997・2002など)。

小松市立博物館には、「月津村柴山出村」と「小松市木場町団地」で採集された柱状片刃石斧2点が所蔵されている。これらの柱状片刃石斧は、前者が大型、後者が中型の完形品であり、西日本から東日本への弥生文化の展開を考察するうえで非常に重要な資料であるが、これまでほとんど知られていなかった⁽¹⁾。そこで本稿では、今後の議論の深化を喚起するため、資料の紹介を行いたい。

なお、本稿の執筆は1を林、その他を森が草稿をまとめ、双方協議のうえ林が加筆・修正した。(森)

1. 柴山出村と木場町の周辺遺跡

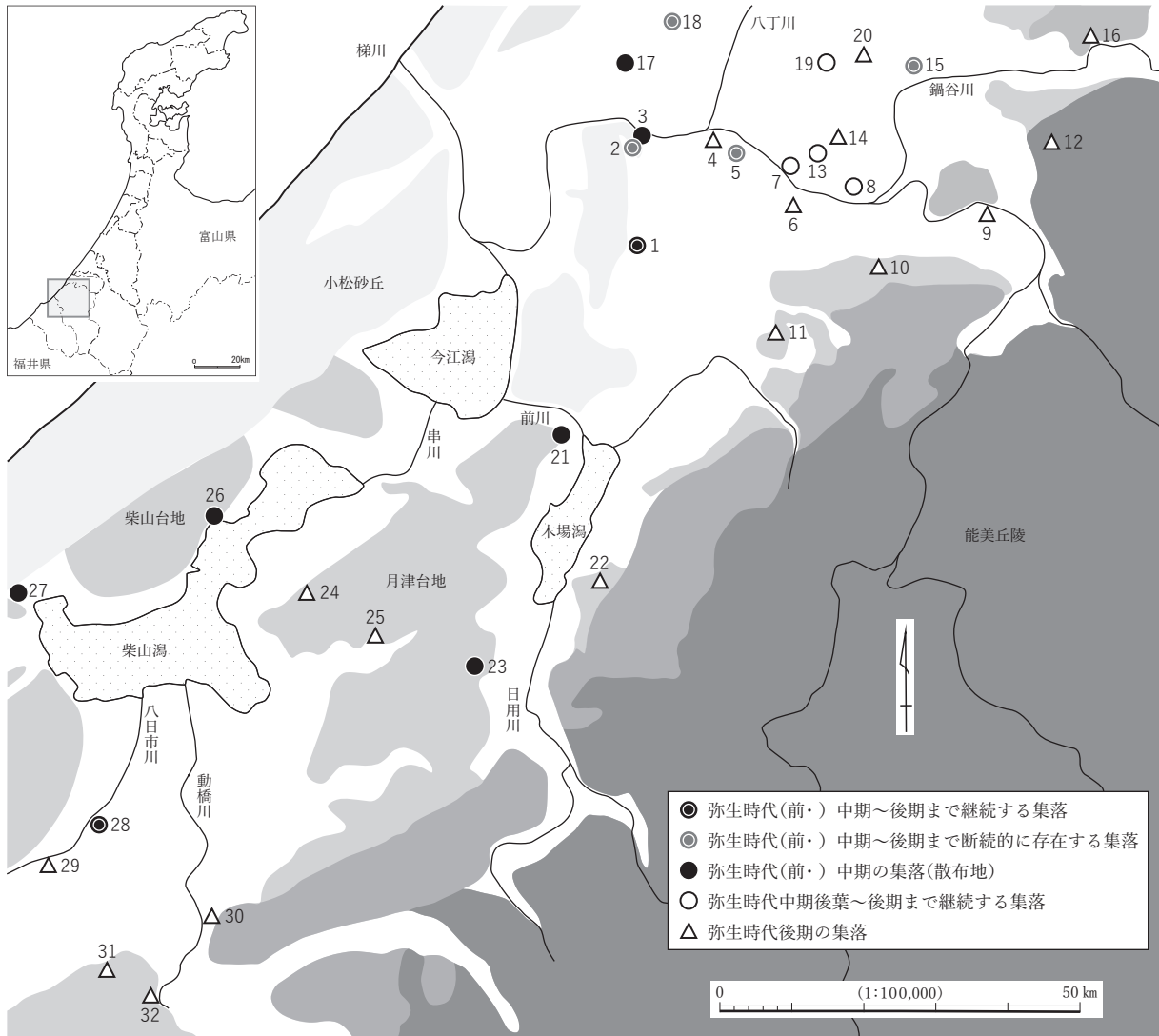
本稿で対象とする2点の柱状片刃石斧は、資料1が加賀市柴山町(旧月津村柴山)地内、資料2が小松市木場町地内で採集された。両採集地は、石川県南部にかつて存在していた加賀三湖(今江潟、木場潟、柴山潟)と呼称される潟湖が群在した水郷地帯の周縁にあたる(第1図)。加賀三湖は、縄文海進ピーク頃(約7,300年前)の海面上昇で小松市付近に形成された内湾域が、小松砂丘の発達によって日本海から切り離された後、河川から供給された堆積物で埋め残された水域と考えられており、今江潟全域と柴山潟南西部を除く6割程度の区域は干拓により耕地化されている(昭和43年完工)。

両資料の採集地は、資料1が柴山出村遺跡(第1図26、県番号636601)のA地点(安(編)2002)、資料2が木場C遺跡(同図22、県番号319800)より1km程度南方に位置する小松市木場台地内と推測され、同じく加賀三湖周辺で弥生時代中期の遺物が確認できる小松市五郎座貝塚(同図21)や加賀市新堀川遺跡(同図27)などとともに、潟湖を臨む台地縁辺部という立地の共通点がみられる。

かつての加賀三湖は、柴山潟が串川で今江潟と連なり、木場潟より今江潟を経由し流れる前川と小松市域北部を西方に流れる梯川が合流して、安宅海岸から日本海に注いでおり、水深が浅く水生動植物も豊富であったことから、舟運を利用した内水面交通や漁業の利便性が高く、潟湖縁辺の低湿部には水田適地が広がっていたことを推測できる。一方で、緩やかな梯川(前川)の流れと限定された河口部(安宅水戸口)は、雨季の増水による水害、渇水期の海水逆流による塩害を発生させ、冬季には風浪で打ち上げられた砂礫が河口を閉塞することで、梯川(前川)下流の水位を上昇させ、加賀三湖周辺に度重なる水害を引き起こしてきた。

加賀三湖周辺に分布する弥生時代中期の集落は、交通路であり生業の基盤をなした潟湖のほとりが選択され、水害のリスクを軽減するため、小規模で継続性に乏しい集落を低湿部に近接した台地上に成立させた可能性が高く、弥生時代後期以降もその立地や集落形態に大きな変化が認められない。

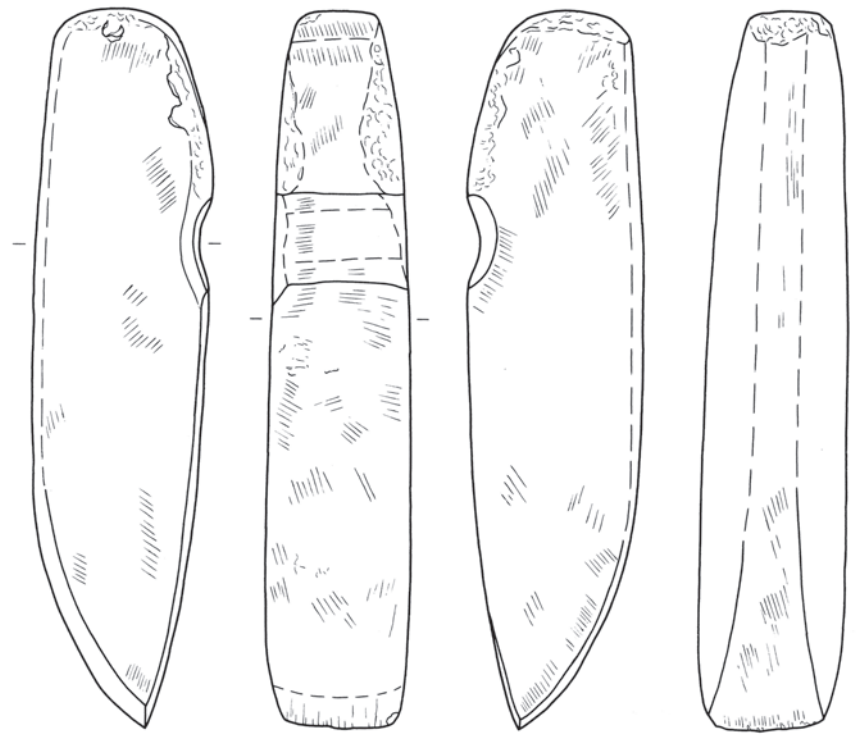
このことは、加賀三湖周辺の南北に所在する比較的広い沖積平野で、小松市八日市地方遺跡に代表される大規模で長期継続的な集落が弥生時代中期に成立・発達し、大規模集落が衰退・解体する弥生時代中期末以降は、これと置き換わるように、梯川水系の中流域や低丘陵上に多数の中・小規模集落を派生させ、水系単位で遺跡群が形成される集落動態と対照的な様相を示している。(林)



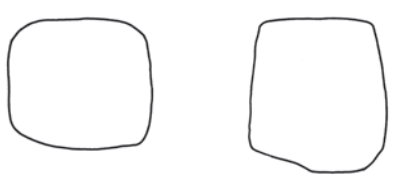
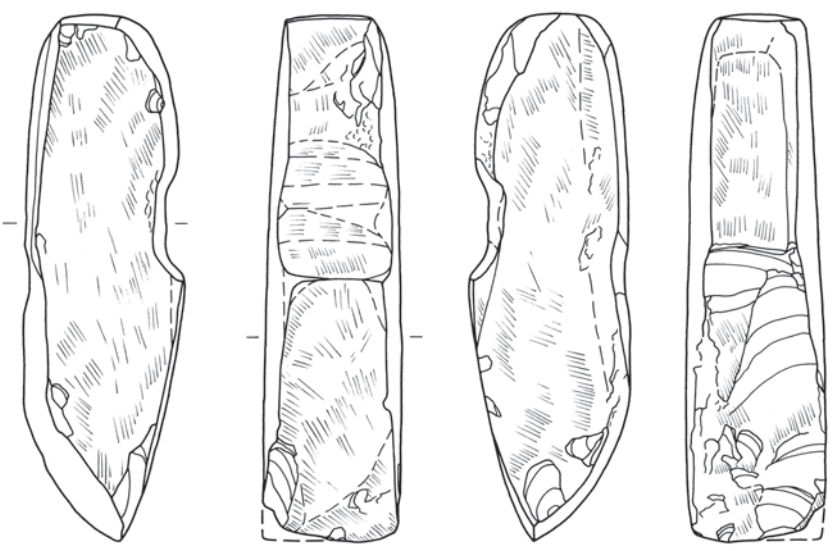
地域	No.	遺跡名	前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前半	後期後半	終末期	古墳前期
-	1	八日市地方	■	■	■	■	■	■	■	■
-	2	園町		■	■	■	■	■	■	■
梯川	3	梯川鉄橋			■	■				
	4	平面梯川					■	■	■	■
	5	白江梯川		■	■	■	■	■	■	■
	6	漆町					■	■	■	■
	7	一針C				■	■	■	■	■
	8	千代オオキダ	■			■	■	■	■	■
	9	荒木田				■	■	■	■	■
	-	10	八幡					■	■	■
	-	11	吉竹					■	■	■
-	12	河田山					■	■	■	
鍋谷川	13	一針B				■	■	■	■	■
	14	千代・能美					■	■	■	■
	15	牛島ウハシ	■	■	■	■	■	■	■	■
	16	八里向山						■	■	■

地域	No.	遺跡名	前期	中期前葉	中期中葉	中期後葉	後期前半	後期後半	終末期	古墳前期
八丁川	17	銭畑				■	■	■	■	■
	18	松梨	■	■	■	■	■	■	■	■
	19	大長野A				■	■	■	■	■
	20	千代デジロA					■	■	■	■
木場潟	21	五郎座貝塚			■					
	22	木場C					■	■	■	■
月津台地	23	島			■					
	24	額見町西						■	■	■
	25	念仏林南						■	■	■
柴山潟	26	柴山出村	■	■	■	■	■	■	■	■
	27	新堀川				■	■	■	■	■
八日市川	28	猫橋						■	■	■
	29	弓波						■	■	■
動橋川	30	松山D						■	■	■
	31	庄・西島						■	■	■
	32	二子塚東田							■	■

第1図 加賀三湖周辺における弥生時代遺跡の分布



資料1
(柴山出村)



資料2
(木場町)



第2図 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧 (S = 1/2)



資料1
(柴山出村)



資料2
(木場町)



写真1 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧 (S = 1/2)

2. 資料の観察所見

本稿で紹介するのは小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧 2 点である(第 2 図・写真 1)。2022年 5 月 30・31日に同博物館にて資料調査を行った。なお斧の部分名称は佐原(1994)に基づく。

【資料 1】

「柴山出村遺跡出土抉入石斧」として登録されているもので、「月津村柴山出村」と墨書きによる注記が右側面にある。本資料は中口ほか(1957)の129頁・第27図-1に掲載されているものと同一である。

抉入柱状片刃石斧の完形品で長さ19.1cm、幅3.8cm、厚さ4.6cm、重量612.3gを測る。灰オリーブ色～緑がかった黄灰色の色調を呈する流紋岩質凝灰岩製である⁽²⁾。全体的に研磨が施されているが、基端部と抉り上部の左右側面との境界部にのみ敲打痕が残存する。平面形は長台形である。横断面形はトンネル形で、左右両側面および後主面側は僅かに膨らむ。抉り上部は基端部に向かって緩やかに内傾する。基端部は丸みを帯びる。基端部から6.0cmの位置に長さ2.5cm、深さ 3 mmの抉りを有する(写真 2 - 1)。抉りの側面形は「」形と弧状(弓形)の中間形で、抉りの上下端は弱い稜をなし中央の底部は平坦である。抉りは横方向の丁寧な研磨が施されている。抉り下部の側面形は刃縁に向かって緩やかに内傾する。刃面上部に鑄はなく曲面をなしており、前主面は直線的である。後主面側の刃縁は使用によるとみられる長軸方向の線状痕が認められる(写真 2 - 2)。

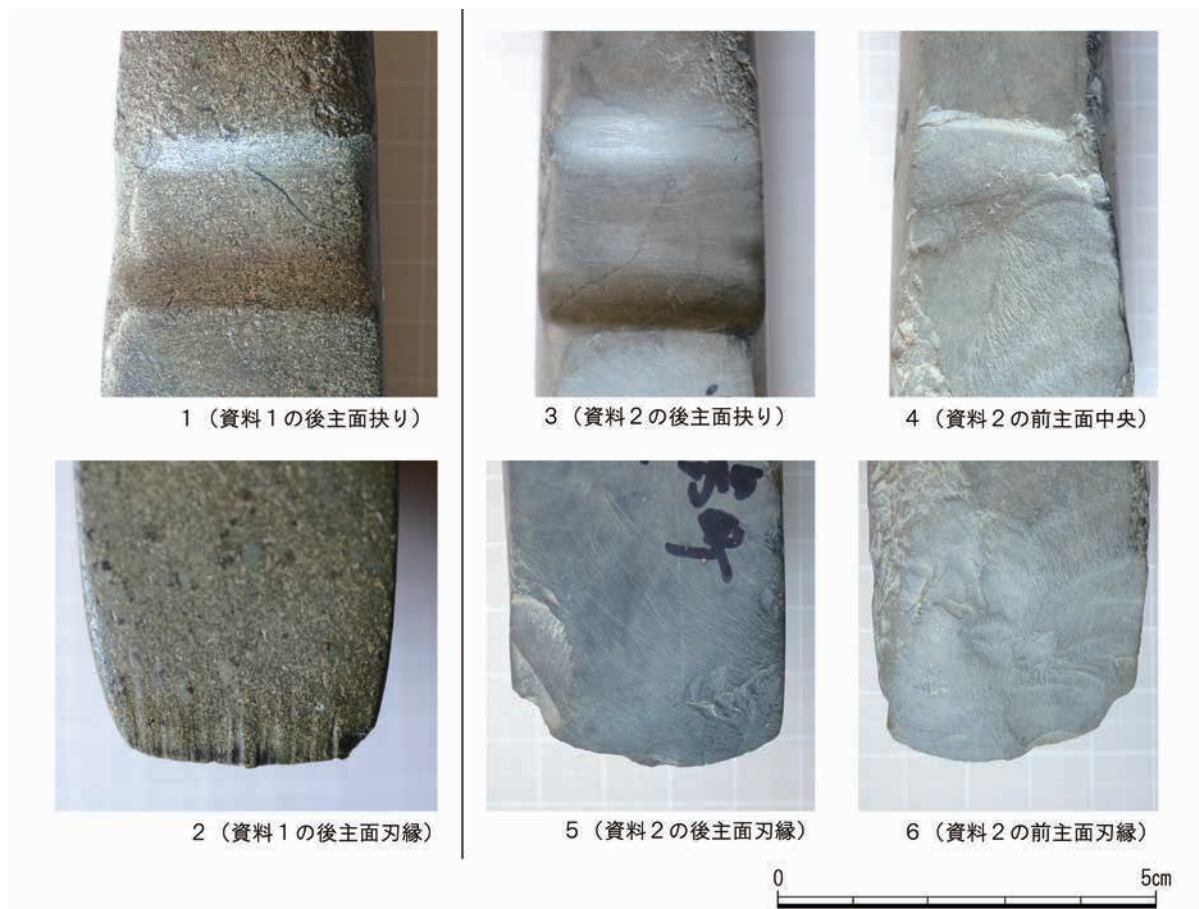
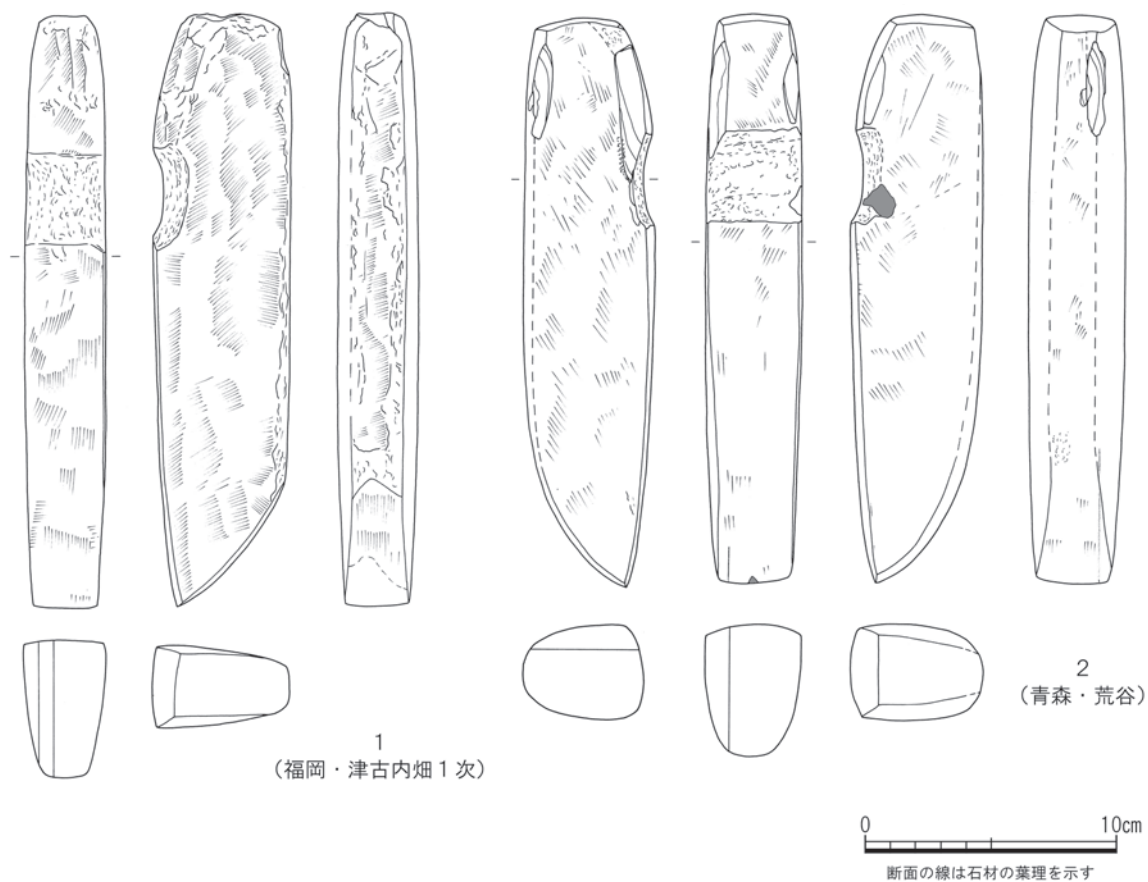


写真 2 小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧の細部 (S = 1/1)



第3図 資料1と関連する資料 (S = 1/3)

【資料2】

「木場町出土磨製抉入石斧」として登録されているもので、「小松市木場町団地」と黒色マジックによる注記が後主面の刃部にある。木場台団地造成(昭和49年完工)の際に採集されたものとみられる。

抉入柱状片刃石斧の完形品で長さ13.9cm、幅3.7cm、厚さ4.3cm、重量376.6gを測る。黒灰色～オリーブ灰色の色調を呈する「層灰岩」^{そうかいがん}(³)製である。風化程度は弱く、光沢を帯びる部分もみられる。石材の葉理方向は不明である。全面的に研磨が丁寧に施されている。平面形は長方形である。横断面形は隅丸方形で、左右側面は僅かに膨らむ。抉り上部は基端部に向かって丸みを帯びながら内傾する。基端部は平坦に研磨されている。基端部から5.5cmの位置に長さ3.3cm、深さ5mmの抉りを有する(写真2-3)。抉りの側面形は「U」形と弧状(弓形)の中間形で、抉りの中央部が僅かに盛り上がる。抉りは横方向の丁寧な研磨が施されている。また、前主面の中央部にも剝離による抉りがあるが、誤って作出されたものとみられる(⁴) (写真2-4)。前主面側の抉りは、抉りの剝離痕を切って器面の研磨が施されている。抉り下部の側面形は刃縁に向かって直線的に内傾する。刃面上面に鑄はなく曲面をなしており、敲打痕が残る。前主面は直線的である。後主面側の刃縁に再研磨痕がみられる(写真2-5)。使用に伴い前主面側の刃部表面が剝離しているが、破損面を切って再研磨が施されている(写真2-6)。(森)

3. 考察：資料の時期的位置づけ

本稿では、小松市立博物館所蔵の柱状片刃石斧2例について報告した。以下では、これらの石斧が製作された時期について類例との比較から考察を行う。

まず資料1は、基端部が丸みを帯びる点と抉りに研磨が施されている点を除くと、青森県八戸市荒谷

遺跡出土品(第3図2)と形態的特徴の共通点を多く見出せる。荒谷例は、横断面形において左右両側面が僅かに膨らみ、形態的に弛緩することから本資料よりも型式学的に新しい。また、福岡県小郡市津古内畑遺跡1次調査出土品(第3図1)にも類似するが、横断面形が平坦面からなる長台形で刃面上部に鑄をもち、平基をなすことから、本資料よりも型式学的に古い。以上のことから、本資料は津古内畑1次例と荒谷例を型式学的に繋ぐ資料として位置づけられる。津古内畑1次例は弥生時代前期中葉から前期後葉、荒谷例は弥生時代前期後葉から前期末を上限年代として製作されたと考えられることから(森2021)、本資料は弥生時代前期後葉から前期末頃の所産といえる。

なお本資料は、下條(1997)による分類でD型式、中(2008)による分類でT I - ii a型式に該当するとみられる。本資料が採集された柴山出村遺跡は、土器型式の柴山出村式(弥生時代前期後葉から中期初頭)の標識遺跡であるが、遺跡が存続した時期の所産とみて大きな矛盾はなさそうである。

次に資料2は、横断面形、抉り下部の側面形など福岡県行橋市下稗田遺跡出土品(第4図1)と形態的特徴の共通点を多く見出せる。下稗田例はA地区95号貯蔵穴からの出土で、伴出した土器から所属時期は弥生時代中期初頭から中期前葉と考えられることから、本資料も同時期の所産であろう。

下條(1997)による分類でC型式、中(2008)による分類でT I - i 型式に該当するとみられる。また、下條(2002)が整理した片刃石斧の展開の第三段階(円形粘土帯土器段階=弥生時代前期末~中期前半)にあたる。なお、本資料が採集された木場町周辺では、現在まで弥生時代前期から中期の遺跡は見つかっておらず、本資料が当該時期の集落の存在を示唆するものとして注視される。(森・林)

おわりに

本稿で紹介した柱状片刃石斧2例は、北陸西部のみならず、西日本から東日本にかけての弥生文化の展開過程を考察するうえで非常に重要な資料である。特に資料1は、東北北部における柱状片刃石斧の唯一の遺跡出土事例である荒谷例の型式学的な位置づけを評価し、その系譜を論じるために欠かせない資料といえる。また資料2は、朝鮮半島東南部で産出する「層灰岩」製である可能性があり、北部九州から北陸地方にかけての日本海沿岸における広域的な交流を示唆するものとして注目される。

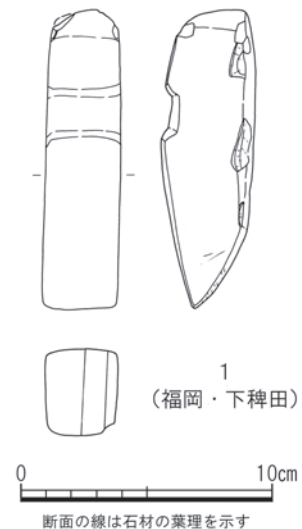
今後、弥生文化の担い手や交流の実態を明らかにするために、関連資料のさらなる研究が望まれる。本稿による資料紹介がそうした研究の一助となれば幸いである。(森)

謝 辞

本稿を作成するにあたり小松市立博物館の山前圭司氏に資料調査でお世話になった。また佐藤由紀男氏、下濱貴子氏からもご教示とご協力を賜った。末筆ながら感謝申し上げます。

なお本稿はJSPS科研費(JP 20H01356・JP 21K00970)の助成を受けたものである。

(註1) これらの柱状片刃石斧2例は、2021年7月17日に開催された2021年弥生時代研究会第4回online学習会の佐藤由紀男氏による「東北北部における弥生時代の磨製石斧の系譜と派生する課題」と題する研究発表において触れられ、その存在を知った。席上、詳細な実測図が公表されておらず、学界への資料紹介が課題であることが確認された。その後、佐藤氏と小松市埋蔵文化財センターの下濱貴子氏に資料の所蔵や文献情報などについてご教示を頂き、資料調査を行う運びとなった。



第4図 資料2と関連する資料(S=1/3)

(註2) 石材の鑑定においては高橋・大木(2015)を参照した。

(註3) 「層灰岩」は主に考古学分野で通称(石器外面の肉眼観察に基づく岩石名)として多用されている名称であり、岩石学分野では一般的なものではない。地球科学的には「火山砕屑物と堆積性砕屑物との混合物が固結した岩石で、特に火山灰と細粒砕屑物の混合した場合を指す」もので(鈴木2005, p.419)、頁岩と凝灰岩との中間の性質をもつ葉理が発達した岩石と理解されている。北部九州における弥生時代前期から中期の片刃石斧や磨製石剣などに多く用いられている。層灰岩製片刃石斧は福岡平野、二日市地峡帯、佐賀平野を中心に北部九州に広く分布し(森2013)、東は石川県小松市八日市地方遺跡まで点在することが指摘されている(佐藤・宮田2018)。近年、層灰岩製石器の石材原産地推定研究が進められ(柚原ほか2020・2022)、福岡県行橋市下稗田遺跡出土の片刃石斧は、韓国慶尚北道高靈郡義鳳山(慶尚超層群新洞層群)の「層灰岩」が石材として用いられたと推定されている(Mori et al.2022)。

(註4) 例外的に挟りが逆につく場合、すなわち後主面側に挟りと刃面のある挟入柱状片刃石斧として、大分県雄城ノ台遺跡出土品がある(立平1997)。

【参考文献】

- 佐藤由紀男・宮田 明 2018「石川県小松市八日市地方遺跡出土の層灰岩製片刃石斧と三面石斧をめぐって」『考古学研究』第65巻第3号 考古学研究会
- 佐原 眞 1994『斧の文化史』(UP考古学選書6) 東京大学出版会
- 下條信行 1997「柱状片刃石斧について」『古文化論叢—伊達先生古稀記念論集—』伊達先生古稀記念論集刊行会
- 下條信行 2002「片刃石斧の型式関係からみた初期稲作期の韓日関係の展開について」『清溪史学』16・17合輯 韓国精神文化研究院・清溪史学会
- 鈴木淑夫 2005『岩石学辞典』朝倉書店
- 高橋直樹・大木淳一 2015『石ころ博士入門』全国農村教育協会
- 立平 進 1997「加工石斧(柱状片刃石斧・扁平片刃石斧)」『道具と技術I』(弥生文化の研究5) 雄山閣
- 中口 裕・上野与一・永井泰蔵 1957「柴山出村の生活—弥生中期—」『柴山潟：自然と社会 柴山潟周辺総合調査報告書』片山津町公民館
- 中 勇樹 2008「弥生時代における片刃石斧の変遷と技法について—西日本を中心に—」『地域・文化の考古学—下條信行先生退任記念論文集—』下條信行先生退任記念事業会
- 森 貴教 2013「弥生時代北部九州における片刃石斧の生産・流通とその背景—「層灰岩」製片刃石斧を中心に—」『古文化談叢』第69集 九州古文化研究会
- 森 貴教 2021「東北地方北部の柱状片刃石斧をめぐって—系譜と時期の検討—」『靫(MOMI)』第10号記念号 弥生時代研究会
- 安 英樹(編) 2002『加賀市 柴山貝塚・柴山出村遺跡』石川県教育委員会・(財)石川県埋蔵文化財センター
- 柚原雅樹・梅崎恵司・森 貴教・川野良信 2020「北部九州, 下部白亜系脇野亜層群のいわゆる層灰岩の全岩化学組成」『地球科学』第74巻第4号 地学団体研究会
- 柚原雅樹・梅崎恵司・森 貴教・川野良信 2022「下部白亜系脇野亜層群と慶尚超層群新洞層群の層灰岩の全岩化学組成の比較」『地球科学』第76巻第4号 地学団体研究会
- Mori, Takanori., Yuhara, M., Umezaki, K., and Kawano, Y., 2022. Estimating the sources of stone tools made of tuffites during the Yayoi period and their archaeological significance, Japanese Journal of Archaeology, 9(2), Japanese Archaeological Association.

【図版出典】

- 第1図：筆者作成
第2図：筆者実測・トレース(小松市立博物館蔵)
第3・4図：森(2021)より一部改変・転載
写真1・2：筆者撮影・作成(小松市立博物館蔵)

石川県埋蔵文化財情報

第 48 号

発行日 2023（令和5）年3月29日

発行 公益財団法人 石川県埋蔵文化財センター

〒920-1336 石川県金沢市中戸町18番地1
TEL 076-229-4477 FAX 076-229-3731
URL <https://www.ishikawa-maibun.jp>
E-mail address daihyou@ishikawa-maibun.or.jp

印刷 前田印刷(株)

©（公財）石川県埋蔵文化財センター